
魔法の生贄ーマジック・サクリファイスー

sutoraikubureido

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の生贄ーマジック・サクリファイスー

【Nコード】

N0311V

【作者名】

sutoraikubureido

【あらすじ】

この世界の魔法は、何処もおかしい…。この世界の魔法にはとある秘密があった…。

その秘密のせいで、俺の大切な人たちは傷ついてしまった…。

だから、俺は決めたんだ。その秘密を破壊するって…。俺たちのように苦しむ奴らが一人でも減るようにって…。

だって、俺もその秘密知る一人なんだから…。それくらいはしらないとな？

でも、途中で迷うこともあるかもしれない。でも、大丈夫だ…だって

て俺は一人じゃないから…。俺には仲間や友達、大切な人達がいるから…。

始まり（前書き）

どうも、sutoraikubureidoです。

この小説が処女作なので、駄文の可能性がありますがどうか読んでやってください。よろしく願います。

それでは、本編をどうぞ！

始まり

??―ゆ、め??―

??―夢だ??―

??―これは夢だ。昔、七年前の出来事の??―

「どこにいるの。父さん、母さん、お姉ちゃん」

僕は歩いていて。僕たちの家があったはずの場所を……そして、立ち止まり周りを見渡す。

「月美（ゆえ）……」

僕は、歩き出しながら周りを見渡す。

「陽菜（ひな）……」

そして、もう一回歩きながら周りを見渡す。

「星歌（せいか）……」

パチパチイ!!

目の前で火がそんな音を立てながら

「熱い」

家があったはずの場所は、火に包まれ今にも崩れそうな家が何とか形を保っていた。

「誰でもいいから、返事してくれ……」

そして、僕は探していた、自分の家族を。

ガラガラッ!!

「!??」

その音がした方向を振り向くと??―

「何とか助かったか？」

「ええ、何とかね！」

父さんと母さん！無事だったのか！

「父さん!!母さん!!」

僕は、傷だらけになった体に鞭を打ち両親に近づく。

「……！大丈夫か！！」

「……！傷だらけじゃない！！待ってなさい、今治すから！！」

「う、うん、わかった」

そう言つて母さんは、僕に魔法（スペル）を使って怪我の治し始めようとしていた。

父さんと母さんは、無事だったけどお姉ちゃんと星歌と月美と陽美は……

「うう……」

？、後ろの方から何か聞こえたような？

「うう、助けて……」

この声、お姉ちゃんの声だ！！

「お姉ちゃん！！」

「……！待ちなさい！まだ怪我の治療が終わってないわ！」

僕は、母さんの声を無視して声が聞こえた方へ向かって行く。

「このあたりから、だよな？」

そして、僕は声の聞こえたほうに来ていた。たしか、ここらへんだと思つただけ……

「お姉ちゃん！？何処！？」

「ダメ、動かせない……」

今度は、右の方から声が聞こえた。

「うう、やっぱりダメ！動かせない……」

「！？、お姉ちゃん！！」

やっぱり！お姉ちゃんだったんだ！でも、お姉ちゃんの上に木の板が何枚も重なって落ちているためお姉ちゃんは身動きがとれないみたいだ。

「お姉ちゃん！？大丈夫！？」

「……？よかった、無事だったのね！」

「待って！今、助けるから！！」

僕は、自分に強化魔法をかけてお姉ちゃんの上にある木の板をど

ける。普通の子供なら無理かもしれないが、今の僕は体に強化魔法が掛かっているから問題ない。

「よっと」

「ありがとう、・・・」

「うん。ところで、お姉ちゃん。月美と陽美と星歌は？」

「えっ？一緒じゃないの？」

「どうやら、お姉ちゃんは僕と星歌達と一緒にいると思っていたみたいだ。」

「うん。父さんと母さんとはさっきまで一緒にいたけど、お姉ちゃんの声が聞こえたからこっちに来てみたんだよ」

「そう・・・」

そう言って、お姉ちゃんは少し顔を伏せてしまった。少し覗き見る事の出来たその顔は、悲しそうだった。両親が無事だった事に対する喜びとまだ見つからない妹と幼馴染の姉妹に対する心配が混ざっているようだった。

その時だ……

「お兄ちゃん……お姉ちゃん」

「！？星歌？」

「星歌、なの？どこにいるの！？」

僕の一つ下の妹の星歌の声が、聞こえた。声の方向からすると、僕らのかなり前の方からだけど……

「・・・！ここにいたの！まだ怪我の治療が終わってないのに！」

「か、母さん！」

「お母さん！今、星歌の声が聞こえたの！」

僕は、母さんの治療の途中でお姉ちゃんを助けに来たから、その事で怒られると思って引き攣った声をだしたが……

「零華（れいか）、無事だったのね！よかった！」

「どうやら母さんは、そんな事はお姉ちゃんの事ですっかり忘れたようだ。」

「零華、星歌の声が聞こえたって言ったけど本当？」

「うん、・・・も聞いたよね？」

「うん、ちゃんと聞いたよ」

「2人共！それは本当か！？」

今度は、父さんもこっちに来たみたいだ。

「うん、本当だよ」

「どこから聞こえたの？」

「あっちの方から」

僕は、自分の前の方を指を指す。

「あっちでいいのか？」

「うん、間違いないよ」

「行ってみましょう」

母さんがそう言うのと僕たちは、星歌の声が聞こえた方に歩いて行った。

「ここらへんかい？」

「たしかに、こっちの方から聞こえたんだけど……」

「お兄ちゃん……お姉ちゃん……お母さん……お父さん」

「星、歌？」

僕は、星歌の声が聞こえた方へ振り向いたが……

「お兄ちゃん……」

「星、歌？」

「なに、これ？」

「これは、この感じまさか！？」

星歌は、そこにいたが・・・「姿」が普通じゃなかった。

背中に不可思議な灰色の両翼を出して、体中に不可思議な紋章を浮かびあげた姿で……

「！あれって！？」

よく見てみると、星歌の後ろに月美と陽美がいた。星歌と同じく「普通じゃない姿」で

月美の方は、左の方から白銀の片翼をだし、右の方からは堕天使のような漆黒の片翼を出していた。

そして、月美の両方の瞳の黒目と胸元のあたりに星歌と同じ、不思議な紋章が浮かんでいた。

陽美の方は、月美と同じように左の方から黄金の片翼をだし、右の方からは天使のような純白の片翼を出現させていた。

さらに、陽美の両足と両手と胸元に星歌と月美同じように、不思議な紋章が浮かんでいた。

「なんだよ、これ？」

「ソウル・サクリファイス
魂の生贄……」

母さんが絞り出すような声で、はつきりそう言った。母さんは、そう言ってしまった……

「嘘だろ、こんなこと……」

魂の生贄。僕は、「俺」は知っていた。これがどうゆうことか……
「嘘だあああああああ？？——！！！！！」

俺の妹と幼馴染二人は、元に戻れないことを……

始まり（後書き）

いかがでしたか？

次回は、設定を出しますので少しネタバレを含む可能性がありますので、嫌な人は見ない方がいいです。

一応、気を付けてるつもりですが誤字脱字がありましたら教えてもらえると嬉しいです。なるべくは修正するつもりです。

それと感想をもらえると嬉しいです。

それでは、また次回！

設定（世界観・用語）（前書き）

どうも、作者です。

更新が遅れてすいませんでした！

少し長くなりますが、この場を借りて皆さんへのお願いがあります。

感想を送ってくれるのはいいのですが、誹謗中傷を感想に書くのは止めて下さい！！

それと、小説を読んでもいないで感想を送るのや他人が書いた悪口などに悪乗りして書いたりするのはやめてください！

上記の様な感想が来た場合は、作者の判断で感想を削除させていただきます。

なお、あまりに感想が酷かったりしたユーザーにはブロックを掛けさせてもらいますのでご了承下さい。

また、自分はアドバイスを書いてるつもりでも作者から見て誹謗中傷だと判断したら、それも消しますので悪しからず。

若干長くなってしまいましたが、それでは設定をどうぞ！

設定（世界観・用語）

世界観（今の時点）

現代より、色んな科学技術が発展している世界。太平洋のど真ん中に浮遊都市がある。

8年ほど前から世界各地で、超能力を使う者達…超能力者（サイキッカー）が確認され始め、今や10人に7人が超能力者の世の中になっている。さらに、5年前から超能力者を育てる為の学校が増えている。

そして、この世界には超能力の他に魔法があるとされているが、真偽は不明。

用語（今の時点）

超能力者（サイキッカー）

超能力者の事。8年前に、突然世界各地に現れ始めた。現れた原因は不明。

超能力者達を育成する学校が、世界各地に在りその中でも有名所なのが巨大浮遊都市（ムー〃フロート）内に在るセントラル学園。生徒の数も、他の学校に比べて多い。

超能力（サイ）

炎を操る能力、水を操る能力、風を操る能力、電気を操る能力など多彩な能力がある。

研究によると、これ等の能力は成長すると言われている成長すると能力が強力になると研究成果が出ている。

超能力には先天的と後天的の2つの特性があり、超能力は後天的に多くて、稀超能力は先天的に多い傾向がある
が後天的に稀超能力が発現する場合がある。

また、発現する事も無い場合がある。

なお、LEVEL?になれる能力者は5000人に1人。

さらに、超能力は遺伝するらしいが、発現する能力もLEVELもランダムで決まる。親から絶対に、親の持っている能力が遺伝するとは限らないが、親の能力をそのまま遺伝する事もある。

稀超能力（シーア）

発見例が無い超能力や発現数の少ない能力の事を指す言葉。

稀超能力については、データが少なくて研究はうまく進んではない。
ない。

また、超能力と稀超能力の両方は精神力で能力を使用する。

精神力

超能力を使用するもの。

能力を使い過ぎると、精神力が切れて能力が使えなくなる。
気絶する能力者もいる。

LEVEL（レベル）

超能力の力のレベルの事。

LEVELの段階は、LEVEL?>LEVEL?>LEVEL

?>LEVEL?>LEVEL?の順。

LEVELが高い程、超能力が強力と言う事になる。
だが、LEVELが低い能力者でも戦略次第でLEVELの高い能力者を倒す事が出来る。

魔法（スペル）

詳細不明。この世界の魔法について、全部把握しているのはごく一部の人間だけ。
解っている事は、超能力とは力の源が違うという事だけ。
さらに、この世界の魔法は何らかの秘密があるらしい。

魔力

魔法を使う時に使用されると言われている。

ただし、その存在を解明した者がいないので空想の域を出ない眉唾物。

魂の生贄（ソウル・サクリファイス）

こちらにも、魔法と同じで詳細不明。

ただ、魔法と深い関わりがある模様。

こちらの解っている事は、コレを行われた者は元には戻れないと言う事。

巨大浮遊都市（ムー・フロート）

太平洋のど真ん中にある浮遊都市。世界中の最新技術を詰め込んだ技術の塊で、3年前に出来たばかり。

ここの学生や住民は、IDカードを持つ事が義務付けられている。

この都市は、色々な区画に分けられている。学校区、住宅区、ショッピング街、オフィス街、研究区の5つに現在は分けられている。また、この都市には色々な国からも来る事が可能で各国にムー・フロート行きのモノレールや、飛行機もある。

セントラル学園

通称「セントラル」。浮遊都市のムー・フロート内にある学校。超能力者の育成が行われている学校。超能力の無い一般の生徒もいる。

超能力者を育成する学校の中で、一番新しい学校。超能力にも色々な種類があるが、殆どの能力の授業を受けられる。ただし、確認例が無い能力を持っている能力者などは特別カリキュラムを受ける事になる。

生徒会

セントラル学園の生徒会。

この生徒会の全員が、LEVEL?からLEVEL?までの能力者で構成されている。

とりわけ、セントラルの生徒会長は他のLEVEL?とは格が違う化け物のLEVEL?で有名。

学校区

文字どおり、学校がある地区。超能力者育成の学校が多い。

他にも、超能力に関係無い一般の学校や超能力を研究している大学もある。

住宅街

こちらでも文字どおりで、住宅がある地区。何かと好条件の家が多い。

この都市では、学生が家を借りる事や立てる事も可能で結構家賃が安い。Gが出ないのも好条件の1つ。

ショッピング街

文字どおり、買い物ができる場所。安くて良いものが手に入りやすい。

ここには、他に飲食店やゲームセンターや本屋もある。学生が、学校の帰りによく来る場所。

オフィス街

ここでは、普通のの一般企業や民間軍事請負会社など様々な企業がある。

また、超能力者のみの会社もある。

研究区

ここでは、超能力の研究や新薬の開発などをしている。最新の技術がかなり集まっている場所なので、警備は厳重。一般人は、まず近寄れない。

ここに入るには、身分証明のためにこの都市の住人が持っているIDカードと立ち入り許可証に許可印を貰う必要がある。

氷上総合研究所

主人公が、いつも武器の整備を頼んでいる研究所。研究所なのに、何故か武器の整備もしている。

よくこの所長は、主人公とは知り合いなので、整備費は比較的安くしてもらっている。

高軌道ステーション

建設途中の宇宙ステーション。色々な国が共同で作業にあたっている。

現在、開発中のステーションの名前は「流星（ミーティア）」

超銃（シグマ）

超能力変換銃、通称「超銃」。主人公の拓人が、よく使っている銃。

超能力を変換して弾丸として打ち出す事を、考えて設計された。使用するには銃の中に変換プログラムがあつて、それが超能力を勝手に循環して超能力弾に変換してくれるので、持ち手は銃を構えて引き金を引くだけでいい。ただし、まだ試作段階でそんなに数も無い代物で壊れやすい。

元々、LEVELの低い能力者が高LEVELの能力者に太刀打できる様に作られた物。

データベース

色々な超能力者のデータがある場所。

LEVEL制限が掛けられていて、見られるデータはLEVELによって制限される。

中には、LEVEL?でも見られない能力者のデータもある。

人喰いピエロ

都市伝説の1つで、ネット上などでは恐れられてる。

噂では、色々なサーカス団に紛れて町から町に移動しながら人を喰ってると言う。

都市隊（アーミー）

ムー・フロートの警察のようなもの。

超能力を使った犯罪の取り締まりもしている部署がある。

設定（世界観・用語）（後書き）

設定は、2つに分けましたので…

今週か、来週あたりにはもう一つの方を出そうと思います。

また、これから設定が増えたりしたら追加で書こうと思います。

えっと、しつこいとは思いますが……

感想を送ってくれるのはいいですが、本当に言い方には気を付けてください。

それに敬語をちゃんと使わないのも失礼です。

良識ある皆さんならわかっていただけたと思います。

では、また。

9 / 13 データベースの設定を追加しました。

9 / 14 魔力と精神力の設定を追加しました。

10 / 8 都市隊の設定を追加しました。

設定（登場人物・能力・魔法）（前書き）

もう一つの設定です。

設定（登場人物・能力・魔法）

登場人物

第一章の時点

上藤拓人（かみふじたくと）男 16歳 12月24日生まれ
この物語の主人公。過去にとある秘密に巻き込まれた者の1人。
普段は、めんどくさがりだけど優しい性格なのだが、本気でキレると容赦が無くなる。

甘いもの好きでもある。超能力と魔法を、両方使える。
実は、8歳より前の記憶が無い。

星歌と零華は本当の姉妹だが、拓人だけ血が繋がって無い。
LEVEL?となっているが、本当はLEVEL?相当の能力者。
能力は名称不明。

拓人は、超銃を使う事が多い。拓人の超銃は、UZI型。

上藤星歌（かみふじせい）女 15歳 10月12日生まれ
拓人の義妹。拓人と同じく、とある秘密に巻き込まれた者。
普段は友達にも敬語だが、家族だけのときは敬語じゃなくなる。
性格は、普段は温厚だがキレると怖い。拓人と同様に、超能力と魔法が使える。

髪型は、黒髪ロングでいつもポニーテールにしている。結構、家

事が得意。

戦う時は、ポニーテールではなく髪を短く結っている。

LEVEL?の風操能力の能力者でもある。

拓人と同じように超銃を使う。星歌の超銃はM1191型。

上藤零華（かみふじれいか）女 19歳 9月9日生まれ

拓人の義姉。拓人の3つ上で、拓人や星歌と同じくとある秘密に巻き込まれた者。

妹の星歌とは、性格が全然違う。少し姉らしくないところがあるが、戦闘の時などは頼りになる。

拓人や星歌と違い、超能力しか使えない。

髪型は、星歌と同じ黒髪ロングでストレートにしている。戦闘の時は、ポニーテールにしている。

妹と同様、家事もできる。

LEVEL?の水流能力の能力者でもある。

拓人や星歌の様に超銃を使う。零華の超銃は、M9型。

煌星月美（きらぼしゆえ）女 享年10才 12月24日没 1月11日生まれ

拓人の幼馴染の1人で、陽菜の双子の姉。

本編の7年前に死去している。

死因は火事による二酸化炭素中毒となっているが、本当はとある秘密に巻き込まれたせいで死亡した。

LEVEL?の重力操作の能力者でもあった。

煌星陽菜（きらぼしひな）女 享年10才 12月24日没 1
1月11日生まれ

拓人の幼馴染の1人で、月美の双子の妹。
姉と同じく本編の7年前に死去している。

死因は姉と同じく火事による二酸化炭素中毒となっているが、本
当は姉と同じくとある秘密に巻き込まれたせいで死亡した。
姉と同じく、LEVEL?で光能力の能力者でもあった。

上藤京子（かみふじきょうこ）女 享年42歳 10月12日没
2月27日生まれ

拓人・零華・星歌の母親。上藤隆の妻。

子供達と夫と一緒に、とある秘密に巻き込まれた者。
普段は優しくておおらかな性格だが、戦闘の時は凜とした性格に
だったよう。

本編の2年前、突然死した。
LEVEL?の水流能力者だった。

上藤隆（かみふじたかし）男 享年38歳 9月9日没 4月1
5日生まれ

拓人・零華・星歌の父親。上藤京子の夫。

子供達と妻と同じ様に、とある秘密に巻き込まれた者。
研究者だったのだが、何の研究をしていたのかは不明。

本編の6年前、謎の不審死を遂げた。
LEVEL?の予知能力者だった。

上藤雅之（かみふじまさゆき）

上藤隆の弟。拓人・零華・星歌の伯父で、セントラル学園の理事長だが来年には理事長を辞めるつもりらしい。

兄の隆と一緒に何かの研究をしていたみたいだが、何の研究かは不明。

妻は10年前に他界している。1人娘がいる。

氷上宏成（ひょうがみこうせい）男 23歳 7月7日生まれ

拓人の仲間の1人で、よく拓人に依頼をする人。

拓人の兄貴分でもある。上藤隆の助手だった。

彼自身も、とある秘密に巻き込まれた者の一人である。

氷上総合研究所の所長で、拓人達の銃や武器を直々整備している。戦闘では、拓人達が束になっても勝てないレベルの力を持っている。

LEVEL?の電気能力の、能力者でもある。

高城幸樹（たかしろうき）男 16歳 7月23日生まれ

拓人の中学からの親友。

急に学校に来なくなった拓人を心配したりと、友達思いな面がある。

幸樹も、能力者である。

能力は、LEVEL?の発炎能力。

綾瀬美希（あやせみき）女 16歳 8月3日生まれ

拓人の中学からの友人で、幸樹の幼馴染。

セントラル学園の副風紀委員長でもあり、拓人のクラスの学級委員長でもある。

幸樹と同じく、急に学校に来なくなった拓人を心配していた。

一応、能力者でもある。

能力は、LEVEL?の水流能力。

黒川奏（くろかわかなで）女 16歳 不明

無口な拓人のクラスメイト。

いつも本を読んでいる。

一応、超能力者なのだがLEVELと能力はデータベースにも載っていないので、どんな能力かは不明。

拓人は彼女の事を知らないのに、何故か拓人の事を知っている様な言動が多い。

とにかく、謎の多い少女。

マリア・レオナード 17歳 女 1月1日生まれ

セントラル学園の生徒会長。 拓人の一歳上。

復学した拓人に、意味深な言葉を投げかけた。

彼女も超能力者で、LEVEL?。

能力は、データベースの閲覧規制が掛けられていて不明。

悪魔のピエロ 年齢不明 性別不明 生年月日不明
サーカス団に紛れていた人喰いピエロ。
狙った獲物は、絶対に逃がさない捕食者。
LEVEL?の血肉喰いの能力者でもある。

能力（今のところ）

発炎能力（フレイム）

部類は、超能力。

攻撃能力の代表格。

炎を操る事が出来る能力。結構多い能力の1つ。

LEVEL?になると、町1つ壊滅出来る力になる。

幸樹などが保有している。

水流能力（ウォーター）

部類は、超能力。

水を操る事が出来る能力。それなりに多い能力の1つ。

水を固体にしたり、または気体にしたりと水の温度も操る事が出来る。

LEVEL?になると、かなり広範囲を一瞬にして凍らせたりする事が出来る。

零華や美希などが使っている能力。

風操能力（ウインド）

風を操る事が出来る能力。

部類は超能力だが、能力者の数が少ない能力。
かなりの攻撃力がある能力。

LEVEL?になると、鉄の扉や鋼などをいとも簡単に切り裂くほどの斬撃を放てるようになる。
星歌などが持っている能力。

電気能力（エレクトリック）

部類は、超能力。

電気を操る事が出来る能力で、発炎能力に次ぐ攻撃能力。
能力の応用性では、超能力ではトップクラス。

LEVEL?になると、海を一瞬でも割るほどの力になる。
宏成などが使っている能力。

地砂能力（デザート）

部類は超能力だが、比較的珍しい能力。

土を操る事の出来る能力で、それなりに攻撃力も高い。
土を操って壁を作ったり、落とし穴を作ったりできるのでどちらかとゆうとトラップ系の能力。

LEVEL?になると、電気能力や発炎能力を軽く凌ぐ攻撃能力を手にする。

重力能力（グラビティ）

部類は、稀超能力。

重力を操る事が出来る能力だが、この能力が使えるのは現在は10数名程しかない。

強力でメチャクチャな能力の1つ。

LEVEL?になると、宇宙空間でも重力を操る事が可能になる。月美以外はデータベースの閲覧規制に引っ掛かって不明。

光能力（ライト）

部類は、稀超能力。

光を操る事が出来る能力で、この能力が使えるのは現在7名程だけ。

これも強力な能力の1つ。

LEVEL?になると、太陽の光を使ってソーラービームを放つ事が出来る。

重力操作と同じく、煌星陽菜以外はデータベースの閲覧規制に引っ掛かって不明。

予知能力（レルス）

部類は、超能力。

文字道理、予知ができる能力。能力者が多い能力の1つ。

LEVEL?になると、様々な事の予知を的確にする事が出来る。上藤隆などが持っている能力。

血肉喰い（カーニバル）

部類は、稀超能力。

生物の血や肉を喰らうことで、自分を強化する能力。

特定の動物を食べる能力者の方が多いらしいが、人間を食べる能力者もいるとの事。

ピエロが使っている能力。

名称不明（ネームロスト）

能力が不明な能力者などに使われてる名称。

拓人や奏、マリアもこれに当てはまる。

魔法（今のところ）

強化（アシスト）

強化魔法。

使用者の体を、強化する事が出来る魔法。

だが、制限時間がありそれを過ぎると元の強さに戻る。

拓人が一番多く使う魔法。

探索（サーチ）

探索魔法。

探したいものを探す時に使う魔法。

これを使って敵の位置を探り、敵の進む所にトラップを仕掛ける事も可能。

星歌が主に使っている。

属性付与（エンチャント）

武器に属性を付与する魔法。

使用している武器に属性を付けることが出来るが、制限時間付きであり効果が切れたらまた掛け直さなければいけない。

拓人が多く使う。

火炎（ブレイズ）

炎属性の魔法。

発炎能力より威力が高いが、攻撃範囲は狭い。

属性付与に使ったりもする。

拓人が多用する魔法。

水（アクア）

水属性の魔法。

水流能力より威力が弱いが、攻撃範囲が広い。

ただし、水流能力と違い温度を操る事は出来ない。

火炎と同様、属性付与に使える。

拓人と星歌が多く使う。

風（エア）

風属性の魔法。

風操能力よりも威力や攻撃範囲も大きいですが、反動が大きく扱いにくい。

だが、現在使える魔法の中ではトップクラスの強さを誇る。属性付与にも使われる。

拓人だけ多く使う。

電撃（サンダー）

雷属性の魔法。

電気能力より威力は段違いに強いが、風同様反動が大きく扱いにくい。

威力だけは、現在使えるなかでトップクラスの強さがある。属性付与に使われる事もある。

拓人が多く使う。

大地（アース）

土属性の魔法。

地砂能力よりも、威力や攻撃範囲も大きい。

属性魔法にも使われる。

拓人と星歌が使う。

設定（登場人物・能力・魔法）（後書き）

凝った設定作るの、やっぱり難しいな。

9 / 2 5 名称不明の設定を追加しました。
1 0 / 8 上藤雅之の設定を追加しました。

再会（前書き）

色々話を考え込んだ結果、二週間も掛かってしまいました。
今後もこのような事があるとは思いますがよろしく願います。

今回の話は、人によっては長いと感じられるかもしれませんが、
それでは、どうぞ！

再会

20××年 8月31日(日)

現在時刻

P M 2 : 4 5

クソッ！俺は……

「兄さん」

俺は、どうすれば……

「兄さん、起きてください。もうすぐ着きますよ」

「はっ！」

俺は、誰かに起こされる声が聞こえて、目を開けた。

「あ、れ？」

えっ？どうゆうことだ？俺、さっきまで……

「兄さん、やっと起きましたか」

いきなり俺の目の前に少女が現れ、俺の顔を覗き込んでいた。

「星歌？」

俺は、呆けながら聞いた。

「そうですよ。それより、大丈夫ですか？うなされてましたけど……嫌な夢でも見ましたか？」

えっ、夢？ああ、そうか夢か……。しかし、今になってなんでもの夢を？

「ああ、大丈夫だ」

「……そうですか。無理はしないでくださいね」

星歌はこつちを訝しげに見ながらそう言った。

「あ、ああ」

はあ、こりや星歌には何の夢を見ていたかばれてるな。

「あと15分程で、ムー・フロートに到着です。」

ん？飛行機のアナウンス？ ああ、そうか。俺達は伯父さんが用意したVIP専用飛行機でアソコに行こうとしてたんだっけ。

「一応聞いておくけど、俺達がどこに行くかわかってるか？」

「巨大浮遊都市ムー・フロート。世界の最新技術の塊、ですよ。それがどうかしましたか？」

やはり、星歌はちゃんと覚えてるみたいだな。

「いや、ちゃんと覚えてるか確認したただけだ。ちょっと、顔洗ってくる。」

俺達が何で伯父さんの用意したVIP専用飛行機乗っているのか、それは、伯父さんにそろそろ復学するように言われたからだ。俺は、とある理由で一年間の間だけ休学をさせてもらう様に頼んで休学していたんだが、もう一年が過ぎてさすがにこれ以上は休学にする事が出来ないとの事で復学するように言われたんだが……

「まさか、星歌がついてくるとは思わなかった」

俺が、こつちに帰ってくる前日に急に「私も一緒に行きます！」

って聞かなかったから、そのまま連れてきたけど……

「伯父さん。ちゃんと手続きしてくれてるよな？」

伯父さん……親父の弟である上藤雅之は、セントラル学園の一応は理事長で星歌の転入の手続きを頼んでただけど、いかんせん頼りないから所が多いからな……

ダメだ！考え出したら悪い方の結果しか頭に浮かばない！考えるのを止めよう！そうしよう！

「でも、大丈夫だろ……たぶん」

それからアナウンスにもあったように15分後に、ムー・フロートの空港についた。

「ここがムー・フロートですか？」

星歌がそんな事を聞いてきた。まあ、星歌はムー・フロートに来るのは初めてだからな。

「ああ、ここがムー・フロートだ」

俺も、周りを見渡ししながら星歌の質問に答えた。

「兄さん、さつきからキヨロキヨロしてどうしたんですか？拳動不審ですよ？」

星歌、拳動不審は余計だ。

「いやな、迎えに来てくれるはず人がいるんだが見つからなくてな」
「迎え？」

「ああ、昨日電話が掛かってきて家まで送ってやるって言って聞かなくてな。送ってもらおう事にした」

「そうですか、それでその人って？」

「星歌も昔会った事がある人なんだが…」

俺はそう言いかけて視線を少し動かした。だが、俺はそこで視線の動きを止めた。

「兄さん？」

ん？ あそこに居るのって…

「星歌、いたぞ」

「えっと、その迎えに来てくれるって人ですか？」

「ああ、そうだ。行くぞ」

「あ、はい」

俺がそう言うと、俺達は迎えに来てると思われる人物の方に歩き出した。星歌は、俺の後をついてきている。そして俺たちは、その人物の前に来た。

「よっ、拓人。久しぶりだな、一年ぶりか」

「宏成さん、久しぶりです」

目の前の人物の名前は、氷上宏成。氷上総合研究所ってゆう所の所長をやっている人だ。

すると、宏成さんは俺の後ろにいる星歌に声をかけた。

「星歌？後ろにいるのは、星歌か？久しぶりだな、こんな美人になつて！」

「はい、お久しぶりです。宏成さん」

あ、不味い。宏成さんにアレを言っておくの忘れてた！

「宏成さん、ちょっと」

俺はそう言いながら手招きする。

「ん？何だ？」

「星歌、少し待っててくれ」

「あ、はい」

俺と宏成さんは、星歌から離れた場所に移動する。

「何だ、拓人？」

「宏成さんに言っておくのを忘れたんですけど、実は星歌には？？」

「――」

宏成さんは真面目な顔をして俺の次の言葉を待っていた。

「――あの時の記憶が無いんです」

「何？」

宏成さんは訝しげな顔をした。

「……あの時の記憶を失くした原因はわかってるのか？」

「やっぱりアレじゃないかと、俺は思ってるんですけど」

「アレか……しかし、本当に記憶を取り戻してどうするんだろうな？あんな事を思い出さなきゃいけないんだぜ？」

そして、宏成さんが聞いてきた。

「お前はどっ思っているんだ？記憶を取り戻す事について」

俺がどう思っているか……か。

「俺はできれば思い出してほしくないけど、本人が決めた事なんで止めはしません」

そう、これは星歌が決めた事だから俺は止めはしない。

「そうかい」

「それじゃ、戻りましょうか」

「ああ、そうだな」

俺がそう言くと、2人で星歌がいる所に戻って行った。

「ほら、こつちだ」

その後、星歌と合流して宏成さんが車を止めた場所まで来ていた。
「まあ、乗れ」

そう言うつと宏成さんが車の扉を開けてくれた。と、その前に……
「そういえば、俺の家の場所わかってます？」

「ああ、分かってる」

ちなみに空港から俺の家まで、3時間から4時間ぐらい掛かる。

「星歌、先に乗れ」

俺は星歌を先に乗らせる。

「あ、はい」

星歌が先に車に乗り込んだ。そして、俺も星歌に続いて車に乗り込む。

「ちゃんとシートベルトしろよ？」

「分かってますよ」

俺はそう返事しながらシートベルトを締める。星歌もシートベルトを締め終わったようだ。

「じゃ、行くぞ」

そう言うつと宏成さんは車のエンジンを入れて車を走らせた。

「で、何か掴めたのかよ？例の事」

車中で宏成さんがそんな事を聞いてきた。例の事ね……はあ……
「すいません。進展無しです」

そう、例の事についてはここ1年間休学して調べても何にも掴めなかった。

「まあ、そう簡単にわかりや苦労しねえか……」

「兄さん、例の事って？私の記憶に関係ある事ですか？」

星歌は、俺達の会話を聞いてそんな事を聞いてきた。

「うん。まあ、関係ある事かな」

「そうですか。あの、ところで宏成さん……お仕事は大丈夫なんですか？」

……何だろ、嫌な予感がする。

「ああ、その事か。それなら大丈夫だ。何故なら？——」

「やっぱり、嫌な予感がする。まさかとは思うけど……」

「部下に仕事押し付けてきたから」

「へっ？」

星歌が素っ頓狂な声を上げる。って、オイ！

「って、やっぱりかよ！また香代さんに押し付けたんかあんだ！？」

俺は、ツツコミを入れる。ちなみに香代さんは宏成さんの助手で苦労人だ。この人は、たまに香代さんに仕事を押し付ける事がある。それも所長の仕事は、他の所員とは比べ物にならないほどの仕事量なので、まあ、そのせいで翌日に精根が尽き果てた状態で見つかる事がある。てゆうか、必ず見つかる。

「ああ、そうだ」

「鬼か。あんた……」

「ははは……」

……香代さん、ご愁傷様です。

現在時刻

P M 7 : 1 2

そんなこんなで、何とか俺らの家についた。

「そつえば、拓人」

俺らが、送ってもらったお礼をして家に入ろうとした時に宏成さんが声をかけてきた。

「何です？」

「例のモノ、バージョンアップしたぜ」

何？ バージョンアップ？

「ホントですか？」

「ああ、整備もしておくから明日の学校の帰りに取りにこいや」

「わかりました」

「んじゃ、明日な」

「はい、今日はありがとうございました」

俺が改めてお礼を言っていると、宏成さんは車を走らせて研究所に帰って行った。

「じゃあ、家に入るぞ」

「はい、兄さん」

俺らは家に入ろうとして鍵を開けて入ろうとしたのだが、普通は開くはずが何故か鍵が閉まった。

「あれ？」

「兄さん？どうかしたんですか？」

どうゆう事だ？普通は、鍵が開くはずなのに閉まるなんて……まさか、誰かが家の中に居る？

俺は周りを見渡してみた。

「！？」

すると、俺は居間で人影が動くのが見えた。おかしい。この家はここ一年は使ってないし、元々この家には俺以外住んでいないはずだ。泥棒か？確かめるしかないか……

「星歌、ここで待ってろ」

俺は、腰のあたりにある銃のホルスターに手を回し、俺の愛用の銃デザートイーグルを取り出す。そして、安全装置を外し、スライドを引く。

「えっ？どうかしたんですか？」

「家の中に誰か居る」

「えっと、泥棒ですか？」

「かもな。ちよっと待ってろ、確かめてくる」

俺がそう言うと、星歌が心配そうな声で

「……気を付けて下さいね」

と言った。

「ああ」

俺がそう返事すると、玄関の扉を鍵で開け、静かに中に入ってしまった。

（さあて、何処のどいつだ？人様の家に勝手に上り込んでる奴は）
俺の家の居間は、玄関を入れて廊下を少し進んだ場所にある。

（ここだ）

俺は居間の扉の前の壁に張り付く。そして、中の音に耳を澄ます。

「……だか……何でつ……たのよ……」

「……別……俺も……やる……」

（さっき見た人影は1人だったが、2人居るみたいだな。うまくは聞き取れないが男1人、女1人つてとこか）

うまく聞こえないのは、家の壁紙が防音性に優れている所為もあるだろうけど。

俺は壁に張り付きながら、少し扉を開いて中の様子を窺う。そして、突入のタイミングを見図る。

そして、中の2人が俺がいる扉の方じゃない方を向いた瞬間？？

（よし、今だ！）

??——俺は思いっきりドアを蹴り開けた。

「……!？」

中の2人はビックリした顔でこっちを向く。

「動くな!!」

俺は、中にいた2人に向けて銃口を向けるが中に居たのは??——

「あれ？美希？幸樹？」

??——俺の中学時代からの友人、綾瀬美希と高城幸樹だった。

「えっ？拓人？」

「えっ？マジで？」

……そういえば、俺この2人に俺がいない時の家の掃除を頼んでおいて、スベアの鍵を渡してたんだった。

「ビックリさせんなよ……」

俺は2人に銃口を向けるのを止め、安全装置を元に戻しホルスタ―に閉まった。はあ、ここ1年間の間にあんな事が多くあったせいで、こういう事に俺が過敏になっているのか？

「び、ビックリしたのはこっちじゃ！！いきなり銃を向ける奴があるか！！」

「本当にビックリした……」

幸樹がすごいビックリした顔をして、思いつきりツツコಂಡきた。

美希は胸を抑えて、床にへたれこんだ。

「お前ら、電気ぐらいつけるよ……で、もしかしくても掃除してくれてたのか？」

美希の方を見ながら聞く。

「うん、まあね。1週間ごとに掃除してたんだけど。今日、まさか拓人が帰って来るとは思わなかったけどね」

「俺のいない間家の掃除してくれてありがとう。それと、今日帰るって連絡しておけばよかったな」

俺は2人の方を向きながら、お礼を言う。

「いいって、そうゆう約束だったし。まあ、今日帰るって連絡はしてほしかったけどな」

「う、すまん」

俺は反射的に謝ってしまった。

「ま、気にしないでいいからね。拓人」

「ああ、ありがとう」

あつ、そうだ。この2人に星歌を会わせておくか。学校で、俺以外にも知り合いが居れば安心するだろうし。

「2人とも。ちょっと待ってろ！すぐ戻って来るから！」

俺は、ダツシュで玄関に向かう。

「「？」」

「星歌！」

「兄さん、中は大丈夫なんですか！？」

「ああ、大丈夫だ。それよりちょっと来い」

俺は星歌に手招きする。

「は、はあ……」

「ほら行くぞ」

俺は星歌の手を掴んだ。

「／／／／／」

そして、星歌の手を掴んで家の中に連れて行く。手を繋いだ時、顔が赤かったのは気のせいにしておこう。

「で、この子誰？」

「だから、俺の義妹」

幸樹とのこんな不毛な会話がさつきから続いている。何回も義妹って言ってるよね？ 何なの、受け入れたくねえの？

「幸樹、その辺にしときなさいよ」

美希が俺達の不毛な会話に終止符を打ってくれた。

「嘘だ…… 零華さんとゆう美人な姉さんが居るのに、そんでもって今度は可愛い妹だと…… おかしい。おかしすぎる……」

幸樹が何かブツブツ言ってるが無視する事にする。

「で、その子が拓人の妹さんなわけね？」

「ああ、そうだ」

「ふーん、そうなんだ」

そう言って美希は星歌の方を向く。

「私は綾瀬美希。拓人とは中学からの友達よ。よろしくね、星歌ちゃん」

それに対して星歌は

「はい」

無愛想な顔をしながら返事をした。

「えっと……」

美希が困った顔をしてこっちを見てる。しゃあねー、フォローするか。

「すまん、美希。コイツ、俺や姉さんや知り合い以外には普通に人見知りするから」

「えっ、そうなの？」

「ああ」

はあく。本当に俺や姉さんに自分の友達以外には無愛想だからな。星歌は。って、忘れるとこだった。

「なあ」

「ん、何？」

「一応、あいつも紹介しとくか？」

「そうね。一応だけど」

そして、俺と美希は幸樹の方を向く。

「ん？何？」

今まで変な事をぶつぶつとつぶやいていた幸樹が、俺と美希の視線に気づいてこっちを向いた。

「私は自己紹介したんだから、あんたもしなさい」

「わ、わかった……」

あの顔の引き攣りよう、たぶんイイ笑顔で言われたんだろうな。あれは怖すぎるからな……

「えっと、俺は高城幸樹。拓人とは美希と同じく中学時代からの友達だ。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

美希の時と同じ顔してるぞ、星歌。

「はあ」

……溜息の多い日だな、今日は。

「つて、お前ら帰らなくていいのか？」

「「へっ？」」

「ほら」

俺は2人に時計を見せる。時刻はすでに8時を過ぎようとしていた。

「っ！？ヤバい！明日遅刻じゃん！」

「それはあんただけでしょ！」

幸樹の場合は、8時から10時に寝ないと学校に間に合わないってゆう事があるからあんな事を言ってるんだろうな。美希は単純にこれ以上いたら迷惑だと思っているからだろうけど。

「それじゃな拓人！明日学校で」

「お邪魔しました！」

2人は物凄い速さで、玄関に向かって行つた。

「……帰ったか」

「帰りましたね」

はあ、何か疲れた。早く飯にして寝るか。明日は学校だし。

「星歌、晩飯作るから手伝ってくれ」

「うん、わかった。お兄ちゃん」

星歌は俺や姉さんの前では敬語ではなくなる。この様に、普段は「兄さん」、「姉さん」と呼んでるのに2人つきりになったり、姉さんと俺の2人が居る時は「お兄ちゃん」、「お姉ちゃん」と呼び方が変わる。まあ、最初は戸惑ったけどもう慣れた。

俺達は飯を作って食べたし、風呂に入ったので、あとは寝るだけとなった。

「それじゃ、お休み。星歌」

「うん、お休み。お兄ちゃん」

俺達はお休みの挨拶を交わし、星歌は姉さんの部屋に、俺は自分の部屋に入った。

（はぁ。これから大丈夫なのか？例の事も進展がないし、何の情報も無いし、星歌の事だって……ああ、寝よう。そうしよう！）

頭が悪い方ばかりに考え始めたので寝るとする。全てが良い方に回るように信じて……

だが、俺は知らなかった。この時、すでに歯車は回り始めていた事に……

再会（後書き）

戦闘に入るのは、三話目ぐらいになる予定です。

それでは、また次回！

姉と少女（前書き）

今回も長いかもしれません。

ちなみに3話目に予定していた戦闘ですが、予め言っておきますが戦闘はそんなに長いものではありませんので、ご注意を。

姉と少女

翌日 9月1日

現在時刻

A M 6 : 1 2

(ふあゝ。んっ、朝か。顔洗うか)

俺は部屋を出て洗面所に向かう。そして、洗面所についた。

「星歌？」

「お兄ちゃん？」

星歌は、洗面所で歯磨きをしていた。

「何だ、もう起きたのか？あと30分は寝られたぞ？」

「お兄ちゃんの手伝いをしたくて早く起きたの」

「そうか」

俺は歯ブラシを取りながらそう答える。

「それじゃ、先にリビングに行ってるね」

「おう」

俺はそう返事しながら、顔を洗う。そして、その後歯を磨きリビングに向かった。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした！」

俺が洗面所から居間に来た後、2人で朝食を作った。そして、今は食べ終わった所だ。

「うん！お兄ちゃんの料理、やっぱりおいしい」

星歌がそう言ってくれた。面と向かって言われると恥ずかしいな

……

「褒めても何も出ないぞ」

ポーカーフェイスでごまかしてみた。

あつ、そういえば。まだ聞いてなかったな。

「星歌、制服のサイズは大丈夫だったか？」

「うん、大丈夫だよ！」

「そうか。なら、大丈夫だ」

俺は、そう言いながら今朝のニュースを見るためにテレビをつける。

『続いては、連続猟奇殺人の続報です。昨日未明、新たな猟奇殺人の被害者と思われる死体が発見されました』

連続猟奇殺人？ この町で？

『6人目の被害者と思われる死体は、他の被害者と同じく胸から腹にまでかけて切り裂かれており、内臓が無い状態で発見されました。また、被害者達は手足の所々を食われており犯人は人肉を食べていると考えられます。また、都市隊^{アーミー}は今日から都市の各区では警戒レベルを引き上げ、警備強化を行うとの事です。』

都市隊^{アーミー}が動くぐらいの事件って事は……相当、ヤバい部類の事件だな。

つてゆうか、このニュース朝から過激すぎね？

「お兄ちゃん……」

星歌が心配そうな顔でこちらを見ていた。恐らく、巻き込まれるんじゃないかかと思っただろうな。考えすぎだったの。

「大丈夫だつて。もしこの犯人が現れたら俺がぶっ飛ばしてやるよ」

俺は、星歌を安心させる言葉を掛けた。

「お兄ちゃん、ありがとう」

少しは安心したみたいだな。

（とは言ったものの、相手が普通の奴なら簡単に倒せるけど、超能^{サイキ}力者^{ツカ}だったならそう簡単に倒せるかどうかは分からないな）

俺は、壁掛け時計をふと見る。すると、そろそろ家を出た方がいい時間になっていた。

「つと、そろそろ出るか。星歌、行くぞ」

「わかったよ。お兄ちゃん」

俺らは、リビングを出て玄関に向かう。

「星歌、まず学校に行ったら理事長室に行くから」

「伯父さんに会うの？」

「ああ、そうだ」

実は伯父さんに「学校に来たら、先に理事長室に来るように」と言われてたのだ。

そして、俺達は靴を履き外に出て、俺は玄関の鍵を閉めた。

「じゃ、学校に行くぞ。こっちだ」

「はい、兄さん」

星歌は家以外では、敬語を絶対使う。本人は「外で、お兄ちゃんやお姉ちゃんと言うのが恥ずかしいから」とか言ってたけどな。

5分ぐらい歩いた所で、後ろから声が聞こえた。

「おい、拓人」

（ん？この声は）

俺は後ろ振り向いた。

「幸樹か」

幸樹だった。あれ？ こいつ、絶対いつも遅刻ギリギリか遅れてきていたはずなのに今日は7時台に起きている……まさか！？

「今日は、大雪か……」

「おい、こら！お前が休学したあとはいつもこの時間だ！」

でも、絶対に8時を過ぎないと起きないこいつがこの時間に？
それだけが不思議でならない。

「幸樹！何を急に走ってんのよ！」

俺が理由を考えていると、美希がそんな声を上げながらこっちに
向かって来ていた。

（ああ、なるほど）

俺は、幸樹が早く起きた理由が分かった。

「俺が休学してる間、美希に起こして貰ったのか」

「うっ……そ、そうだ」

「まさか俺がいない間、毎日か？」

「は、はい。そうです」

俺が休学する前は俺が起こしに行つたんだが、俺が居ない間は美希が起こしに行つてたみたいだな。こいつ、中々起きないからいつも遅刻ギリギリなるとゆうのに……あいつ、風紀委員で学級委員長で遅刻ギリギリって事を考えると、罪悪感が……

「あつ。拓人、おはよう」

「おはよう。美希」

声が、引き攣つてしまった。

「どうしたのよ？変な声出して」

「いや、幸樹に俺が休学してる間に俺に変わつてこいつを起こすしてたつて、聞いてな」

「気にしないでいいわよ。私が好きでやつたんだし……それに」

「それに？」

俺がそう言つと、美希がイイ笑顔で……

「ちゃんと起きなかつたら、コレだしね」

そう言つと、自分の右手に水を纏わせて自分の顔の前に突き出した。

「つて！実力行使かよ！」

俺は思わずツツコンでしまった。何で能力使うのさ……

（あれ？美希は確かLEVEL？の水流能力で、幸樹がLEVEL？の発炎能力つてゆう事は……）

俺は、幸樹の方に顔を向ける。

「前に言つたろ？俺は水が苦手なんだよ」

ああ、力関係でそうなったのね。

「あの、兄さん？」

すると、蚊帳の外にいた星歌が俺に声を掛けてきた。

「何だ？星歌」

「そろそろ行かないと遅刻しますよ？」

「えっ？そう？」

「はい」

俺は、自分の腕に着けている腕時計を見る。たしかにそろそろ急がないと不味いな。

「幸樹、美希。俺ら先に行くから。星歌、行くぞ」

「はい、兄さん」

俺は、美希と幸樹に先に行く事を告げてからその場から早歩きで急いだ。

「つて、拓人？何で早歩きしてんだ？」

「幸樹！走りたくなかったらあなたも早く歩きなさい！」

「へ？つて、ヤバい遅刻する！」

幸樹達も自分達が遅刻する事に、気付いたみたいだ。

俺と星歌は、後ろにいた幸樹達を置いてけぼりにして、先に学校

……セントラル学園に来ていた。

「じゃ、まず理事長室に行くぞ」

「はい」

俺らは、まず昇降口で上履きに履き替えて理事長室に向かった。

昇降口にいた時、こっちを見ていた視線がウザったが。

「兄さん？どうかしましたか？」

俺がそんな事を考えていたら、星歌が俺に声を掛けてきた。

「いや、何でもない」

だが、俺はあくまでポーカーフェイスで通す。

「つと、ここだ」

しばらく校舎内を歩いていたら、理事長室の前に来ていた。

俺は、理事長室の扉を4回ノックする。

「どうぞ」

すると、中からそんな返事が聞こえた。

「失礼します」

俺がまず扉を開けて、先に入る。

「失礼します」

続いて星歌が入る。そして、俺が扉を閉める。

「やあ、拓人。久し振り。約束通り戻って来てくれてうれしいよ」

「ああ、そうだね。伯父さん」

この人が、上藤雅弘だ。俺らの伯父さんでもある。

「お久し振りで。伯父さん」

すると、星歌が伯父さんに挨拶した。

「うん。久し振りだね、星歌」

「はい、そうですね」

「伯父さん。星歌のちゃんと転入手続きしてくれました？」

俺は伯父さんに確認する。まあ、大丈夫だと思うが念のため。

「もちろんしておいたよ。って、僕、そんなに信用ないのかな？」

「少しだけ」

俺は、ズバツと言ってやった。

「うつ……相変わらず妙な所で素直だね……。ところで……」

少し凹んだ様子を見せた伯父さんだったが、すぐに復活して別の事を聞いてこようとしていた。

「何です？」

「例の事はどうなっているんだい？」

「それかい……」

「それなら進展無しだよ。情報が全然無いに等しいんだから」

「そうか」

伯父さんは、少し考え込んでいるみたいだ。

「うん、考えこんでもしかたないね。さあ、そろそろ教室に行かないとね。今、2人の担任を呼ぶからね」

伯父さんはそんな事言つて、電話を掛け始めた。

「もしもし、私だ。うん、2人で理事長室に来て。それでは、後程」
どうやら電話を掛け終わつたみたいだ。

「もうすぐ2人の担任の先生が来るから」

伯父さんがそう言つた数分後、俺らの担任の先生が来て俺らはそれぞれの教室に連れて行つてもらつた。

「ここがあなたの教室よ」

「ここですか？」

俺は担任の先生に案内されて、これから通う自分の教室の前に来ていた。そこには2ーBとあつた。

「それじゃ、私が呼んだら入つて来てね」

「分かりました」

俺がそう返事すると、担任の先生は教室に入つて行つた。

「みんな、おはよう」

「おはようございます、椎名先生」

この声は美希だな。つてことは、幸樹もいるのか？ あいつら何だかんだで同じクラスになる事が多いし。担任の先生の名前は、椎名先生とゆうのか。覚えておかないと。

「ええと、今日は事情があつて休学してた子が復学します」

「先生、男ですか？女ですか？」

おい、誰だ。定番過ぎる質問したのは？

「残念。男の子です」

「ちっ」

おい、今舌打ちした奴ら覚えてろよ。

「それじゃ、入って」

「はい」

俺は椎名先生に呼ばれたので、教室に入る。

「やっぱり」

「やっぱりね」

この声は幸樹と美希か。他にも見た事ある奴らがちらほらいた。

「もしかしたら知っている人もいるかもしれないけど一応、自己紹介して」

俺は、教壇の真ん中に立った。そして、自己紹介する。

「しってる奴もいるかもしれないが、上藤拓人だ。とある事情で休学していたが、この度復学する事になった。これから1年間よろしく頼む」

俺が自己紹介を終えると教室中で拍手が起こる。が

（ん？何だ？この視線？）

俺をじつと見てる視線に気が付いた。その視線の方を見る。

その視線は、黒髪の美少女と呼べる女の子から向けられていた。

（あの子から、だよな？）

俺がそんな事を考えていると、椎名先生から声が掛かった。

「それじゃ、上藤君の席は黒川さんの隣ね」

それは、さっき俺をじつと見ていた女の子の隣だった。

「はい」

俺は言われた通りに席に座る。俺をじつと見ていた女の子……黒川さんに一応、声を掛けておく。

「えっと、よろしく」

「……よろしく」

一瞬、ビククリしたような顔をしたがすぐ返事してくれた。

「それじゃ、HRを始めるわね」

そう言くと椎名先生は、HRを始めた。俺はHRでの話を真面目に聞く事にした。

「ホント久し振りだな！」

「まあ、な」

俺は、1年の頃同じクラスだった奴らと話していた。

そこへ……

「……ちよつといいかしら？」

隣の席の黒川さんが話掛けてきた。

「えっと、何かな？」

「ちよつと来て」

そう言つと、黒川さんは俺の手を掴んだ。

「へっ？」

戸惑う俺を無視して黒川さんは、俺を何処かに連れて行く。

「ここなら大丈夫ね」

俺はやつと手を離して貰えた。

（ここは、屋上？）

「あなたに聞きたい事があるの」

「えっと、聞きたい事？」

「一体、何を聞きたいんだ？」

「まず、あなたは本当に上藤拓人？」

俺は疑問に思った。何で黒川さんがそんな事を聞いてくるのか解らなかったから。

「どうゆう意味だ？」

「そのままの意味よ」

「そのままの意味で言つたら、俺は間違いなく上藤拓人だ」
「そう」

何の意図で俺にこんな事聞いてきたんだ？

「黒川さん」

「奏でいいわ」

「は？」

俺は思わずそんな声を上げた。

「私の名前。苗字じゃなくて、名前の奏でいいわ。さん付け無しでよく解らんが、名前で呼んでいいってことだよな？」

「じゃあ、奏」

「何？」

「何で俺にこんな事を聞いてきた」

「さあ、なんとなくかしら？」

「はあ？」

俺はまた変な声を上げてしまった。なんとなく……

「時間を取らせてごめんなさいね。それじゃ、わたしは先に教室に戻るわ」

奏はそのまま踵を返すと、屋上の扉を開けて屋上をあとにした。

「何だったんだ？」

俺は納得が行かなかったが、俺も教室に戻るため屋上をあとにした。

P M 1 2 : 0 5

あれからH Rが終わり、午前中の授業が終わり昼休みになる予定だったのだが今朝のニュースでやっていた、連続猟奇殺人事件のせ

いで暫らくは午前中で授業が終わりになるにらしい。

「拓人、どうする」

「どうするって？」

「午後の事だよ」

ああ、それね。どうするかな。

あつ、そうだ。

「まず、星歌を迎えに行くか」

「って、おい」

「星歌を除け者にする事は出来ない」

「妹に対してもシスコン発動ですか」

「うっ……」

こいつ、気にしてる事を……

「まあ、先に星歌ちゃんを迎えに行ってから午後の事を考えましょ」

美希、ありがとう。危うく幸樹に弄られるところだった……

「確か、星歌ちゃんの教室は1年D組だったわね」

何で美希が知ってたんだよ……俺もまだ知らなかったのに。

「おい、星歌。迎えに来た、ぞ？」

美希に案内してもらった教室に入ろうとした所で、俺は固まった。

「星歌、一昨日ぶりね」

「ね、姉さん！？だ、抱きつかないで下さい！」

あれ？俺、疲れてるのかな？ここに居ないはずの零華姉さんが見えるたからだ。

「えゝ！いつもみたいに「お姉ちゃん」って呼んでよ？」

「呼びません！！」

って、アレ、完全に姉さんだね？はあゝ、周りの奴ら若干引いてるぞ。

「おい、姉さん」

俺は姉さんに声を掛ける。

「ん？この声は、拓ちゃん！？拓ちゃん！」

姉さんは、星歌を離し今度は俺に抱きつこうとする。が?????
??

「静かにせんか！」

??????俺の拳骨が姉さんの頭に炸裂し、それは叶わなかった。

「痛ったああ！何でグーで殴るの！？拓ちゃんの拳骨、痛いんだよ！」

自分の心に聞いてみな。

「兄さん、助かりました」

姉さんに疲れて、星歌が俺にお礼を言ってきた。

「礼は良いって」

(つて、何で姉さんがここにいるんだ?)

俺はあそこにいるはずの何で姉さんが、セントラル学園にいるのか気になった。

「おい、姉さん。なんでここにいいのか1から10まで説明してもらおうか？」

「えつとね、ほっちゃんと拓ちゃんに会いたいと思ってきたのと此処の保険医になるから伯父さんに来たのが理由かな？」

俺達に会いたいつて、なんちゅう勝手な……つて、ん？ 聞き捨てならない事を聞いた気がするが……

「姉さん、今なんて言った？」

「え？だから、ほっちゃんと拓ちゃんに会いたいと思って……」
「違う！その後！」

「此処の保険医になるから来たつてどこ？」

「そう！それ！」

姉さんが保険医つてどうゆう事だ？ 姉さんの場合、能力的に警備員の方が良い思うが……

「何で私が保険医になるのか？って顔してるね、拓ちゃん」

「当たり前だ。何で保険医？」

「私の能力、思い出してみて」

（姉さんの能力？LEVEL？の水流能力だろ？あつ……）

水流能力は周りの水だけでなく、体内の水……つまり血液や体液などの水も操れるとゆう能力だ。

「つまり、水を操って血液を止めたりする事が出来るから？」

この能力を使って、母さんや姉さんに美希が怪我をした所の血を止めるのを何度も見たからな。それが無かったら分からなかった。

「そう、正解。さすが、拓ちゃん！ご褒美に、私がハグしてあげるね！」

何故か知らんが、また抱きつこうとして来る。

「やめろ」

だが、俺は右に動いてそれを避ける。

「もう、イケず」

「うるさい。人前で抱きつこうとするな」

「人前じゃなければいいの？」

「黙らっしやい。てゆうか、伯父さんの所に行かなくていいのかよ？」

「あつ、そうだった。それじゃ、ほっちゃん、拓ちゃん。また後でね」

姉さんはそう言うと、踵を返して理事長室の方に行った。

「相変わらず嵐みたいな人ね」

「だよな」

すると、蚊帳の外にいた美希と幸樹が喋った。

「はあー。本当に姉さんは……」

俺は少し頭を抱えた。

「あの、兄さん」

頭を抱えていた俺に、星歌が話しかけてきた。

「午後はどうするんですか？たしか、昨日宏成さんが研究所に来い

とか言ってませんでしたっけ？」

ああ、そういえばそうだったな。

「何だ？宏成さんの所に行くのか？」

「ああ、渡したい物があるらしいから」

「んじゃ、その用事が終わったらここに来てくれ」

そう言つと、幸樹は紙に何かを書き俺に渡してきた。

「ん？『カインス』？」

「最近できたゲームセンターだ。俺らそこにいるからさ」

「おう、わかった。じゃ、後でな」

「あいよ。じゃ行こうぜ、美希」

「まあたまにはいいかもね。それじゃあね、拓人」

2人はそう言つと、先にゲーセンに向かって行った。

「じゃ、俺達は研究所の方に行くぞ」

「はい、兄さん」

「まさか、本当に拓人なの……」

少女は誰も居ない教室で1人呟いた。

「また、会えた……」

少女の顔が笑顔になる。が……

「また、あの苦しみを拓人は味わうの？……」

少女の顔は、悲しむ顔になり瞳から涙が落ちる。

「させない…… あいつらにこれ以上拓人を苦しませない！」

少女は涙を拭き、決意を改めて固める。

「私が死んでも……」

少女がそう言つと、スカートのポケットに手をつ込み宝石のよ

うな物を取り出す。

「私を導いて……」

少女の言葉に答える様に、宝石が煌めく。

だが、少女は気付いていなかった。

すでに、拓人に魔の手が迫りつつある事を……

姉と少女（後書き）

書く事が無い……

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311v/>

魔法の生贄ーマジック・サクリファイスー

2011年10月10日03時24分発行